

ホスピタルアートのシンポジウムに参加して

アートを介してグリーンフケア

縁あってシンポの座長に

17年前、美術家の日野間尋子さんとの出会いを契機に「びょういんあーとぶろじえくと」の活動が当院で初めて開催されたとき、医療の現場にアートを採り入れることはまだまだ珍しい試みでした。現在では、アートが人間の心にもたらす力が広く理解され、医療のさまざまな場面でアートの触れる機会が増えています。



シンポジウムの座長を務める志田理事長

昨年10月に札幌で開催された第47回日本死の臨床研究会年次大会では、当院の志田理事長が「つらさやかなしみを持つ人々をそばにあるアート」をテーマに作品を展示しました。

日本死の臨床研究会は1977年設立の歴史ある研究会で、医療はもちろん、教育、福祉、宗教などさまざまな領域で活動する人たちが参画。分野の垣根を越えて、死の臨床で悩み苦しむ方々にどのような援助ができるかを研究し続けています。



びょういんあーとぶろじえくとの日野間さん



四国こどもととなの医療センターの森さん

各地の参加者から質問

12日(土)11時10分から行われたこのシンポジウムは、びょういんあーとぶろじえくとと関わりのある緩和ケア医で同研究会代議員の小田浩之先生が企画。その縁で志田理事長に座長の声がかかりました。70分枠の前半で、日野間さんがびょういんあーとぶろじえくとの活動を、アートディレクターの森合音さんが四国こどもととなの医療センターでの取り組みを紹介。患者さまやご家族だけでなく医療従事者の心も癒すアートの実践例に、



ポスター発表で体験を語る志田理事長

終末期を考える機会に

この年次大会には、参加費当院負担で地域連携室の森田亜樹室長をはじめとする職員も参加し、多数のシンポジウムや発表を聴講しました。ご高齢の入院患者さまが多い当院では、「死の臨床」における終末期ケアは重要な課題です。遺族や医療従事者のグリーフケア(grief care)喪失の悲嘆へのケアを含め、避けられがちな「死」の話題も真正面から見据え、当院はより質の高いケアを実現する取組を進めていきます。



年次大会後にひだまりホールで懇話会。シンポジウムを企画した小田先生(左端)と弾む会話

年次大会会場に展示されたびょういんあーとぶろじえくとの作品



梅田力さんの作品



瀬川葉子さんの作品



参加型アートワーク



佐藤隆之さんの作品

医療法人北志会

基本理念

私たちは、地域における病院使命を果たすうえで、「安心・信頼・満足」を目指し、よりよい医療サービス実践のため日々研鑽します。

基本方針

- 一、患者様の生命を尊重し、人間としての尊厳及び権利を尊重します。
- 二、専門の医療を提供し、安心して療養に専念できる環境を整備します。
- 三、職員は、責任と誇りを持ち、日々学習し、専門職としての使命を果たします。
- 四、職種・職域を超えたチーム医療を目指します。

札幌ライラック病院は皆様に次のような権利があることを認め尊重いたします。

1. 医療を受けるにあたって、大切な一人の人間として尊重されます。
2. 受診される方の個人情報やプライバシーが守られます。
3. 病状や病名、検査結果、受ける処置やケアの内容について十分に説明が受けられます。
4. 適切な説明のもとに受診される方の意思が尊重され、最良の治療やケアが選択できるように支援します。
5. 人工呼吸器装着で会話ができない患者様は、パソコン等の利用で患者様の意思の尊重や人としての尊厳を守っております。
6. 身体的なことだけでなく、必要に応じて社会的・心理的な事柄に関しても支援されます。
7. 療養の経過すべてにわたって、ご希望されれば複数の医師の意見を求めることができます。
8. 最善で安全な医療と必要な健康教育を受けることができます。
9. 医学研究等に参加をお願いすることがありますが、拒否することによって不利益を被ることはありません。